

## 『古事記』におけるオーストロネシア語族神話との対応例と「民間キリスト教」のインド・パシフィック的起源

ユーリ・ベレツィン(ロシア科学アカデミー人類学・民族学博物館、サンクト・ペテルズブルグ)

少なくとも『古事記』の二つのモチーフがオーストロネシア語族に対応例を有する。その一つが食物女神の死体からの栽培植物の起源の神話だが、もう一つの方はまだ研究者によって気づかれていないように思われる

問題となっているモチーフは天地開闢の神話(1-6章)に含まれている。イザナギとイザナは天からオノゴロ島に降ってきて、互いの体の部分の相違について言葉を交わす。そしてイザナは右から、イザナギは左から原初の柱を廻り、出会ったところでイザナが「何て美しい若者でしょう」といい、イザナギが「何て美しい乙女でしょう」といって結婚する。すると虫が生まれる。天の神に相談すると、婚姻の儀式を再度執り行い、今度はまず男性が声をかけるようこと助言を受ける。その後、イザナは日本の島々と神々を生み出す。

この神話は台湾先住民のところに対応例がある。アミ族の神話では、洪水の後、生き残った兄と妹が結婚したが、生まれたのはヘビとカエルだった。太陽神は神々を遣わして、二人に神聖な儀式のやり方を教えた。その後、彼らは普通の子供が生まれるようになった(Ho Ting-Jui 1964: 39-40; 1967, no. 94: 268-269; Matsumoto 1928: 122-123)。この神話の異伝では、洪水を生き延びた兄妹は太陽神から結婚の許しを得るが、生まれたのはカニと魚だった。月神は近親の結婚は一般に認められていないので、二人はマツを挟んで交わるべきだと教える。その後、妹は石を生むが、その中には四人の子供がいて、彼らはアミ族と中国人(漢族?)の祖先となった(Matsumoto 1927: 123; Walk 1949: 96)。パイワン族の伝承では、神々が再度結婚するように命じるモチーフはない。しかし、それ以外の部分はアミ族の神話と似ている。洪水を生き延びた兄と妹は結婚するが、生まれた子供は盲目だったり肢体不自由だったりした。そしてその次の子たちにはそれほど障害はなく、最後の子たちはまったくの健勝児だった。

同様の神話はインドネシア・ボルネオ(カリマンタン)島に住むガジュ・ダヤク族のもとでも知られている。ダヤク族の創世神話はいくつか知られているが、そのうちのいくつかはパイワン族のものと同様類似している(原初カップルの最初の子供たちは動物か精霊だが、再度の婚姻はない)。しかし少なくとも異伝の一つには神々の指示による再度の婚姻のモチーフが見られる。マハタラは天から二本の木を投げ落とし、それらは男女に変わる。最初、女性は流産するが、胎児たち(血の流出物?)は落ちた場所や置かれた場所(水中、地面、森)に応じてさまざまな精霊になる。その後、マハタラが地上に降りてきて、カップルに婚姻儀礼のやり方を教える。すると女性は三人の男の祖先たちを生む(Mallinckrodt 1924 in Schäfer 1966: 76-77)。

原初カップルが何度か子供を生むが、そのうちの一部は精霊や虫(他に爬虫類、猛獣など)になり、一部は人間になったというテーマは、フローレス島のオーストロネシア語族にも認められる(Fischer 1932: 227)。フィリピンのマンダヤ族の伝承は、これほどは類似していない(精霊の起源のみ)(Cole 1913:172)。地理的により遠方だが、類似例はチベット・南アジアのビルマ語派やドラヴィダ語族にも認められる。例えば、レプチャ族(Sieger 1967: 112-113)、ブンゲン族(Elwin 1958a, No.4: 10-13; 1958b, No.5: 112-114)、カチン族(精霊の起源のみ)(Gillhodes 1909, No.33: 116-117)、プラヤ族(Thaliath 1956: 1033-1034)などである。これらのアジアの伝承は、より北西の地域においてもよく似た例が知られている。たとえば、北ロシアやベラルーシ(Belova 2004: 246)、カリア人(Belova: 245-248)、ノルウェー人とアイスランド人(Christiansen 1964:No.39: 91-92; Simpson 1972: 28-29)、サーミ人(Enges 1999: 229-230)、ウドムルト(ヴォチャーク)人(Moshkov 1900: 202; Potanin 1883: 800)、コミ人(Limerov 2005, nos. 66, 353: 63, 404-405)、北キルギス人(Tolstov 1931: 275)などで

ある。

西ヨーロッパ、南ヨーロッパ、北アフリカの全域に見られる多くの伝承はこれと多少異なっている。神が最初の女性のもとを訪れるが、彼女は子どもたちの一部を隠す。隠された子どもたちは精霊や爬虫類にはならない。彼らは貧しい庶民となる。これに対して神と会った子どもたちは富者や高貴な者の祖先となる(Uther 2004, no. 758: 425-416)。

ヨーロッパ、北米、そして中央アジアの例はキリスト教徒やイスラム教徒の「民間信仰」に典型的である。これらのすべての場合に原初カップルはアダムとイヴだが、最初の女性から生まれる子どもたちは聖書にもコーランにも関係はないし、地中海域やヨーロッパの古い神話にも類例は見当たらない。このモチーフは東方から伝わった一連のモチーフの一つである(例えば、「元来の大地は空より大きかった」、「大地は牡牛と／あるいは魚によって支えられている」、「最初の人間の体はより硬くて、その名残りが手足の爪である」。そしておそらく「太陽は結婚できない、その子どもたちが世界を燃やしてしまうから」も)。非アリア系インドからオーストロネシア世界までのインド・パシフィックアジアにおいて、これらのモチーフは実際の神話的信仰の一部をなしている。西方世界にもたらされると、これらは公式のキリスト教やイスラームの教義では無視されている「民間キリスト教」や「民間イスラーム」に取り込まれた。

こうしたユーラシア横断的な図式の中に『古事記』はどのように位置づけられるだろうか。大部分の東アジア、南アジア、そして東南アジアのケースの大部分と比較するなら、『古事記』のヨーロッパのケースとのつながりはかなり弱いし、もちろんその出所ではない。しかしアミ族やガジュ族の例とは明確につながっている。これら三つには原初カップルが人間や神々と並んで精霊や虫も生むというモチーフに加えて、高位の神々の命令による再度の婚姻によって健勝な子どもたちだけが生まれるようになるというモチーフが含まれている。こうした一連のエピソードはアルタイ語族(韓民族を含む)やアイヌや古アジア諸語族には類例が知られていないので、日本には南から伝わったのだろうし、オーストロネシア語族には北からは伝わらなかったのだろう。『古事記』が編纂されたのが後712年だという点を考えると、「人間／神々ばかりでなく精霊も原初カップルによって生まれる」と「新たなあるいは正式な結婚の儀式が最初の子どもたちの性質を修正する」という二つのモチーフは、台湾や東南アジアの諸島部の伝統的神話に深いルーツがあると考えられる。つまり、問題となっているこれらのモチーフは東(東南)から西(北西)に伝播したのであってその逆ではない、とするのが妥当な見解であろう。

北米ブリテニユ・コロンビアのツィムシャン・インディアンの例もこの見方をさらに支持する材料を提供する。ツィムシャンの創世神話(Boas 1895, No. XXIII/2: 278; 1902: 72; Deans 1891: 34)は近隣のタルフタン族(Teit 1919-1921, No. 21: 216)のみならず、『古事記』(32章)、『日本書紀』(2章)やフィピン(アパヤオ族、トゥポリ族(Eugenio 1994, No. 165, 182, 282, 307-308; Wilson 1947b: 87)。ウラフ・パプア族(Schmitz 1960: 241-243 in Yamada 2002: 69)にもおそらく認められる)にも類例を有する。ツィムシャン神話にはヨーロッパからの影響の痕跡は皆無であり、「元来の肌は手足の爪のように硬かった」というモチーフを含んでいる。つまり、このモチーフはツィムシャン族の祖先がアメリカに移動するより以前から東アジアにおいて知られていたということになる。そしてこの論理をさらに進めるなら、問題となっているモチーフが東から西ユーラシアに伝わったという結論となってくる。

神話モチーフが紀元前の諸世紀におけるユーラシア横断的な経済的、文化的リンクの形成の始まりからすでにユーラシア大陸を横断して伝播されていたという事実そのものは、不思議とは思えない。しかし、コスモロジーに係わるあるクラスもモチーフ全体の伝播が、東から西という一方向のみであったというならば、それは注目に値するし、その理由を説明するのは容易ではないだろう。